

『 私たちの困難な航海 』

使徒の働き 27章 1～20節

◆ 航海の目的(主の約束)

ローマ皇帝へ上訴したことにより、パウロは開放されることなくローマへと移送されることになりました。それはパウロが最も願っていたことでした。【勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない(23章11節)】と、主が約束してくださったことが今、果たされようとしています。これから始まるパウロの航海は、主なる神様の目的と約束の下にある旅路であると言うことを忘れてはなりません。私たちの人生という航海、私たちの教会の歩みという航海にも、主は必ず目的と約束を与えてくださっています。私たちの人生そして教会の目的は主の栄光を現し、主の栄光を伝えることです。2020年、私たちの教会は「主に信頼する教会」として歩み始めました。礼拝の充実、救われて受洗者が与えられることに加え、教会の成長を皆で祈りつつ歩んでおります。単なる希望ではありません。礼拝、救い、成長は主なる神様が私たちに与えられた約束であり、私たちの教会の希望です。私たち教会の歩み(航海)の目的は礼拝、救い、成長であることを念頭にテキストを読み進めて行きましょう。

◆ 順風満帆ではない航海

パウロのローマ移送は船で地中海を渡る航海の旅でありました。【1節】“私たちが”と記されているように、著者ルカもこの航海に同行していたと考えられます。そして移送される囚人はパウロの他にも数人いたようです。囚人たちの移送責任者はローマ軍親衛隊(皇帝直属の部隊)の百人隊長ユリアスという人物でした。

2節によれば、パウロが乗船した船は小アジアの各都市に寄港しながら地中海沿岸を航行するアドラミテオ(ムシヤの港)行きの船でありました。カイザリヤを出航した船は翌日にはシドンに到着します。ここシドンはエルサレムとアンテオケの間にある都市でしたからパウロの友人、仲間が大勢いたことでしょう。船が停泊している間、百人隊長の好意によりパウロはこの友人たちを訪ねることが許され、主にある交わりを持つことができました。そしてシドンを出航すると、船はミラという都市に向かいます。通常、シドンからミラに直行する場合は、キプロス島の西側ルートを行くのですが、4,5節によれば地中海の西風が強くなり向かい風のために、キプロス島の東側を回り小アジア沿岸を航行したことが記されています。これからの航海に何か不安を抱かせる序章のようです。ミラの港においてパウロを含む乗船者たちは、アレキサンドリヤからローマへ向かう船に乗り換えています。この船はエジプトで収穫された麦など多くの穀物をローマへと運ぶ大きな船で、300人近くが乗船できる船でした。しかし読み進めて行くと、この航海が決して順風満帆ではない旅であることが分かります。【7-8節】先ほど向かい風＝地中海の西風によりルート変更したことを確認しましたが、今、パウロが乗船するこの大きな船もまた、その向かい風を受け、なかなか前へ進むことが出来ません。何日も費やしてやっとのことで、小アジア南西端のクニドに到着です。そしてクニドを出航して更に西に進みたいのですが、【風のためにそれいじょう進むことが出来ず】地中海の北西の風により、沖へ沖へと船は流されてゆくのです。クレテ島のサルモネ沖を航行して、クレテ島の東側にある良い港に、やっとのことで寄港できたのでありました。

このパウロの航海は、ローマで主を証しするという目的のために、主が約束された旅路でもあります。しかし今朝のテキストから確かに受け取りたいことは、主が私たちに与えてくださる航海の旅は決して順風満帆な旅路ではないということです。私たちの人生、教

会の歩みは主の約束の下にある旅路であっても、そこに困難は必ずあるということを覚えたいのです。なぜならその困難が、私たちの歩みにおいて大切なことを教えるからです。

◆ 困難を受け入れる

やっとのことで寄港した港は「良い港」でありましたが、悪天候の中、碇を降ろして停泊するには不向きな場所でありました。【9-10節】ここまでの旅路は予定以上の日数が経過していました。そして【断食の季節もすでに過ぎていた】とは毎年9月終わりから10月にかけて守られていた「贖罪、贖いの日」が過ぎていたということです。つまり11月に差し掛かっていました。地中海では11月11日から3月5日までは冬の嵐が予想されるため航海は禁止されており、その危険な時期に入っていたのです。パウロはこれ以上の航海では、積荷や船の危険のみならず、いのちに危険が及ぶことも考えられるため、ラサヤの町で避難してはどうだろうかと言いました。パウロはこの航海における困難に直面したとき、その困難を受け入れているのです。しかし百人隊長ユリアス、そして他の多くの乗船者たちは違いました。【11-12節】船旅のプロである航海士、船長、そして多くの乗船者は、停泊に不向きな良い港を早く出帆して、ここより安全と思われるクレテ島海岸続きのピニクス港に停泊して冬をやり過ごそうと考えたのです。当然、積荷と船を失うわけにはいかなかったでしょう。命の危険はあるかも知れないが、ピニクスは目と鼻の先だから何とかなると考えたのでしょう。この困難を自力で脱して乗り越えようしました。パウロはこの航海の最大の困難に直面したとき、この困難を受け入れて、守るべき最大のものに目を注ぎました。一方、船旅のプロ、百人隊長、他の乗船者たちは、いのちは当然だけれども、船も積荷も失いたくありませんでした。そして何とかこの困難を自力で脱しよう、乗り越えようともがき始めたのです。

結局、航海が続くことになります。13節によれば、これまでの強い北西の風ではなく、穏やかな南風が吹いてきた時を見計らい、この時とばかりに碇を上げて良い港からピニクス港に出帆します。しかし【14-15節】。ユーラクロンと呼ばれる北東からの激しい暴風に見舞われ、良い港から目と鼻の先の目指すピニクス港からどんどん船は遠ざかってゆくのです。何とか困難を脱して春を待とうと考えたピニクス港には到着できず、ただただ風に吹き流されることになったのです。この暴風によって船は大きな損害を受けたようです。備え付けの小船が破損したのでしょう。ようやくのことで小船を処置して船体に固定します。しかしこのままではスルテスの浅瀬に座礁してしまう可能性があり、あらゆる船具を外す必要に迫られます。そして【18-20節】。暴風に逆らうことの出来ない船と乗船者たちは、ローマに無事に運ぶ必要があった麦などの穀物を海に捨て始めます。難破して三日目には船具まで捨て始めます。船が沈没の危機に陥っていたことが読み取れます。彼らは積荷や船のみならず自らの命の危機を感じていました。これを結果論で済ませてはいけません。パウロは主が約束されたこの航海なのだから、この困難も主のご計画の中にあると受け入れる信仰に立っていました。一方、他の乗船者たちは自らの知恵と力でこの困難から脱しようと考えました。そして、自らの命を危険にさらすことになったのです。

◆ まとめ・お勧め

主が私たちに備えてくださる航海の旅は決して順風満帆ではありません。そこには必ず困難が伴います。ですから困難と思えるときこそ、その困難を受け入れたいのです。自らの知恵や力で困難を脱しようともがくことを止めたいのです。主が目的をもって私たちの歩みを導き、守ってくださるのですから、私たちは信仰を持ってその旅路の中にある困難を受け入れたいのです。そして、主の力に拠り頼むのです。

【ヨハネによる福音書9章2-3節】をお開きください。困難を通して主の力ある業が私たちに現されるのです。私たちの罪を赦す救い主の大いなる業が私たちの歩みに現されるのですから、私たちは尚一層、主への信頼を強めることが出来るのです。